

2020年2月7日(金)

令和元年度 TOKAI原子力サイエンスフォーラム 資料
東海村産業・情報プラザ

原発被災者はどのようにして 生活を立て直してゆけるのか

東北学院大学 人間情報学研究所 客員研究員 庄司貴俊

1

本研究の前提

脱原発／反原発の動き



島根原発
2019年11月 筆者撮影

脱 原 発

筆者作成

しかし・・・

× 原発を社会から取り除く = 原発と共存(せざるを得ない)

事故が起きないようにすること + 事故は“起きる”もの

従来の研究: 属地的

本研究: 人びとの実践の可能性／豊かさ(属人的)



原子力施設との共存の在り方／原子力災害との向き合い方

2

本研究の前提

脱原発／反原発の動き



島根原発
2019年11月 筆者撮影

脱 原 発

筆者作成

しかし・・・

× 原発を社会から取り除く = 原発と共存(せざるを得ない)

事故が起きないようにすること + 事故は“起きる”もの

従来の研究: 属地的

本研究: 人びとの実践の可能性／豊かさ(属人的)



原子力施設との共存の在り方／**原子力災害との向き合い方**

研究内容の説明

◇問題意識

→過去経験のない水準の原発事故

“**原発災害**”と称される

被災者はどのように

生活を立て直しているのか？



20km圏内を示すバリケード
2015年1月 筆者撮影

◇問題背景

「復興」 = 属地的(田中 2019)

「通い復興(凍結型)」(今井 2016)

では、“属人的”な復興とは？



帰還困難区域を示すバリケード
2019年8月 筆者撮影

本研究の目的

なぜ人びとが原発被災地で暮らし続けることができるのか
その論理を明らかにする。

◇大災害後でも災害前と変わらない日常的な行動

→農地の手入れ

原発事故により作ることをやめた田んぼ

大災害後にも、変わることなく残り続けるもの



手入れされている田圃
2015年10月 筆者撮影



「災害前の日常」に注目

5

先行研究

◇被災者の多くが先行きも見えず不安な毎日を送っている
(原口 2013)

◇原発事故は将来展望を描けない多くの人を生み出した
(川瀬 2014)

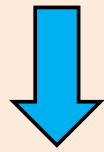
◇避難者は先行きの見えない状況と対峙してきた
(松園 2016)



「予見」の剥奪

6

・被災者の暮らしがあった「『ふるさと』は、人と自然のかかわり、人と人のつながり、そして時間の持続性にかかわるもの」(関 2019:49)



事故による長期的な避難

3つの次元(松井 2018)

- ①空間の次元: × 元通りの生活空間を取り戻せるイメージ
- ②時間の次元: × 進行する時間と止まった時間との折り合い
- ③関係の次元: × 固有の誰かとしてみられ聞かれる手応え

原発事故の発生 → 他地域への避難 → 3つの次元の崩壊 → 予見の剥奪

7

事例地概要(福島県南相馬市X集落)

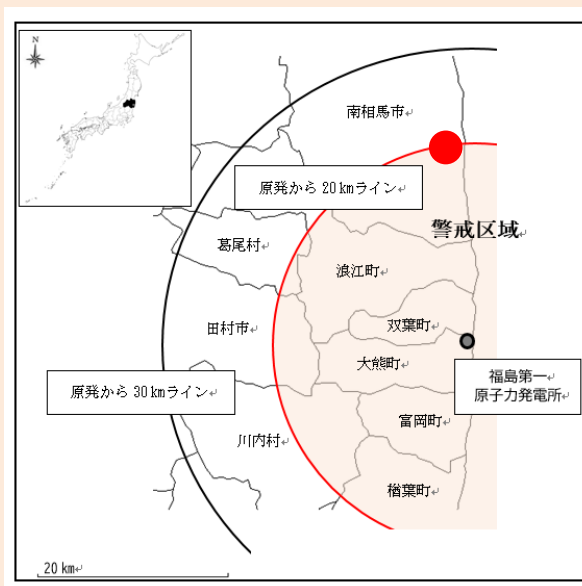


図1 調査地地図(広域)
筆者作成

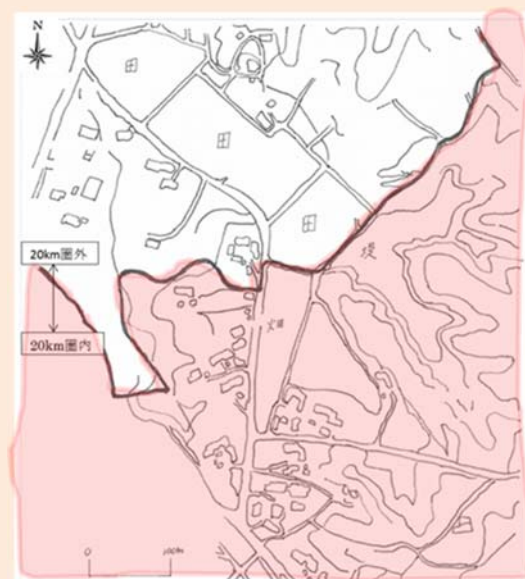


図2 集落地図

(出所)原子力災害対策本部事務局住民安全班作成資料より筆者作成

8

事故の影響

◆事故前の概要

集落の生業 = 農業(とくにコメと春菊)
→農家13戸(兼業農家)
→年間を通して働いていた

◆事故後の概要

全13農家が農業をやめる

しかし・・・

荒廃した農地がない = 農地の手入れだけは継続
なぜ??

9

なぜ農地を手入れするのか



草が生い茂るハウス
2015年10月 筆者撮影

荒らすと笑われる対象

恥の意識



手入れされている田圃
2015年10月 筆者撮影

働き者として周囲から認知

★恥をかかない = 隣近所と今まで通り対等



関係の次元の回復

10

なぜ事故前と同じ周期で農地と関わるのか

- × ただ手入れをする
- 季節の巡りあわせに合わせている



資料画像
2019年12月 筆者撮影



事故前と同じやり方 = 事故前の時間感覚



時間の次元の回復

11

なぜ農業が“できる”と考えられているのか

- × もう農業はできない・・・
- もし～すれば・・・できる



手入れが行き届く田圃
2015年10月 筆者撮影

例「もし堆肥を入れれば、すぐに栽培できる」

「もしちゃんと耕せば、コメをいつでも作れる」



仮定した場合、農業が“できる”と考えている



空間の次元の回復

12

小まとめ

◆原発事故で崩れた住民の生活に関わる“3つの次元”

①空間のイメージ ②時間感覚 ③隣近所との関係

→回復

{ × 人びとの生活は元通り → ○ 中間にある
× 元に戻らないことが確定



生活時間の仮構築

13

◇「元に戻る／元に戻らない」考えから一度距離をとる

{ 避難元地域に戻る → 多くの時間を要する…
避難元地域に戻らない

復興が完了するまでの**猶予期間**の創出



「**仮**」の状態を生活のなかに作り出し自らの身を置く



原発被災地となった地域で暮らしを立て直すための論理

14

本研究支援事業へ

これまで得た情報 = 本事例地における知見

たった1ケース・・・ 本当なのか？？

- ①どこまで他地域に当てはまるのか？
- ②当てはまらない場合、それはなぜかを考察



一般性／普遍性

- ・酪農家
- ・漁師

15

酪農家の事例(福島県南相馬市小高区Y地区)

概要

酪農家:5戸(約300頭の牛)

警戒区域の設定 = 避難



飼育していた牛は餓死



牛魂碑の建立

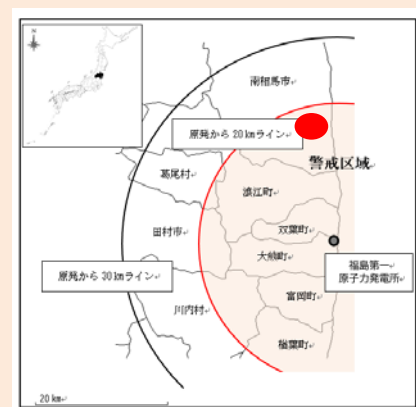


図3 調査地地図
筆者作成

Hさんの事例(阿部山 2015)

- ・飼料作物の栽培 → 畜産成立のため
- ・酪農家の手伝い → 昔の仕事ができる

16

他の酪農家の事例(石田 2020)

再開への思いが断ち切れなく帰還



時間の経過とともに再開への意欲が減退



他の牧場で手伝い = 酪農家としての葛藤

→経済動物として見る／見れない
牛のことが好き／嫌い



当人も整理がついていない
(再開 — **中間** — 断念)

17

漁師の事例(福島県浪江町請戸地区)

概要

- ・漁船90隻
- ・シラウオ／カレイ／コウナゴ／スズキなど



図4 調査地地図
筆者作成

津波により地区は壊滅／漁船9割流失



* 警戒区域

船が残った方／新しく作った方(26隻)



漁港および漁業の再建(現在:試験操業中)

さん(沖出しで船が無事)

「いつかは魚を採れて売れるだろう」／「請戸も立ち直れる」



水揚げの様子
2019年8月 筆者撮影

18

「(漁業が)できない」はない

→「魚はいるし、いずれ落ち着くと考えている」

→「今は今の内だけ」

空間の次元
時間の次元
の担保



水揚げされた魚
2019年8月 筆者撮影

○船のため

→ただ置いていても痛む

⇒船を活かすように活動 = 準備はできている

◎**復興に向けて協力していないと「やりづらい」**

→みんな頑張っているのに・・・船は協力しないと・・・

⇒「そんなことをしたら、よく思われない」

関係の次元

19

考察

◇酪農家の場合

→本論理を基本的に支持

→差異 = “**このまま**”でよいという意味の存在

◇漁師の場合

→本論理を基本的に支持

→差異 = “**仮でも現実的**”(「今の内・・・」という語り)

“予見の再創出”と“予見の担保”

◇酪農家の事例

「仮」=予見をもつため

「過去→現在→未来」のなかに再び自己を位置づける



予見を作ること自体に意義がある(予見の再創出)

{ △ 事故前の生活
◎ 「仮」の生活 → 徐々に「本当」の生活へ変化

21

◇漁師の事例

“仮”=予見を維持するため

「過去に思い描いていた未来」に近づける



予見を維持させることに意義がある(予見の担保)

{ ◎ 事故前の生活
△ “仮”の生活 → 徐々に“元”の生活へ変化



生活時間の仮構築

酪農の事例 = 「仮」→ 本構築

漁業の事例 = “仮”→ 再構築



請戸の海
2019年8月 筆者撮影

22

X集落の“その後”

新しい道の選択
→ 田圃を貸す



手入れがされている田圃
2015年10月 筆者撮影

→



草が生い茂る田圃
2019年9月 協力者撮影

× 事故前の生活

△ 【仮】の生活

→ 徐々に【新しい】生活へ変化

* 深刻な高齢化／体調不良／病気

新しい選択 = 田畑が荒れないことを見守る

* そうせざるを得ない事情



X集落の事例 = 【仮】→ 新構築

23

仮の行く先—事故から9年を迎えて

—3つの方針と仮の差異—

① 中間状態(このままの継続) = 本構築

② 元に戻る = 再構築

③ 元に戻らない = 新構築

一般論: 事故 → 元に戻る
 → 元に戻らない

本研究: 事故 → 仮 → “仮” → 元に戻る
 → 【仮】 → 元に戻らない
 → 「仮」 → 中間状態のまま

24

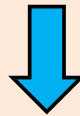
仮の重要性

仮＝モラトリウム

精神的な余裕

＋

自分の考え／意思をもつための“時間”



仮 ＝ 選択肢の創出 ＋ 選択権



主体性／能動性

25

文献

阿部山徹, 2015「震災を機に生命を見つめ直し、改めて地域の酪農の原点を知る－福島県南相馬市の酪農家の軌跡」『共済総研レポート』2:26－31.

原口弥生, 2013, 「東日本大震災にともなう茨城県への広域避難者アンケート調査結果」『茨城大学地域総合研究所年報』46:61-80.

今井照, 2016, 「『住民』の再定義から始めよう－原発被災地における凍結型復興(通い復興)の提言」『地方議会人－議会研修誌』46(10), 16－20.

石田晃大, 「曖昧に生き続けることの意味－避難区域の中にいる元酪農家を事例に」金菱清編『曖昧な喪失と和解の物語－災害をめぐる「行方不明」という問い』(仮題)新曜社:印刷中

川瀬隆千, 2014, 「宮崎への避難・移住者の実態と今後の支援－東 日本大震災・原発事故による避難・移住者へのアンケート調査報告」『宮崎公立大学人文学部紀要』22(1):1-16.

26

松井克浩, 2018, 「『宙づり』の時間と空間—新潟県への原発避難の事例から」第91回日本社会学会大会報告原稿.

松園 祐子, 2016「原発避難者の生活再編と地域再生の課題—福島県富岡町の事例から」『日本都市社会学会年報』34:25-39.

関礼子, 2019, 「土地に根ざして生きる権利—津島原発訴訟と『ふるさと喪失／剥奪』被害」『環境と公害』48(3):45-50.

田中重好, 2019, 「復興を社会学からどう研究するか」第92回日本社会学会大会報告原稿.

調査研究部 震災復興調査班, 2013「畜産農家の原発避難と放射能汚染との闘い—福島県南相馬市での酪農再開に向けて」『共済総研レポート』4:21—7.

* 本研究の一部は東海村委託事業「地域社会と原子力に関する社会科学研究支援事業」による資金を使用した

27

本研究の前提

脱原発／反原発の動き



島根原発
2019年11月 筆者撮影

脱 原 発

筆者作成

しかし・・・

× 原発を社会から取り除く = 原発と共存(せざるを得ない)

事故が起きないようにすること + 事故は“起きる”もの

従来の研究: 属地的

本研究: 人びとの実践の可能性／豊かさ(属人的)



原子力施設との共存の在り方／原子力災害との向き合い方

28

青森県東通村

◇Aさん

15kmという距離について

→福島事故が起こる前までは“遠い”

事故後は“近い”

事故があったら、住めないと思う・・・



地域を離れることに

抵抗感がみられない



薄い関心



筆者作成



東通村の様相
2019年9月 筆者撮影



東通村の様相
2019年9月 筆者撮影

29

島根県鹿島町(片句／手結地区)

◇Bさん

不安はない。今更反対しても・・・

避難しない。やることがないから・・・

◇Cさん

不安はある。あるもんだというあきらめ。

事故があったら2度住めないと思う。



どうにもならないという考え



諦念



筆者作成



片句地区
2019年11月 筆者撮影



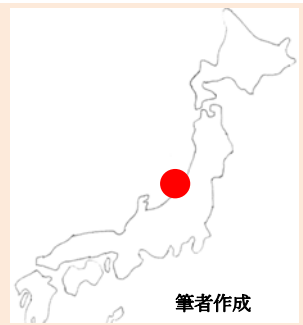
手結地区
2019年11月 筆者撮影

30

新潟県柏崎市(荒浜／松波地区)

◇Dさん

不安はある。事故があったら住めないと思う。
賛成／反対は難しい。原子力施設で働いて
いる人がいるから一概に言えない・・・



◇Eさん

不安はある。事故があったら住めないよ。
福島事故を見て無関心から反対になったが、
原発で働いている人がいるから、表立って言えない・・・



↓
意思表示すること困難な状況

↓
葛藤

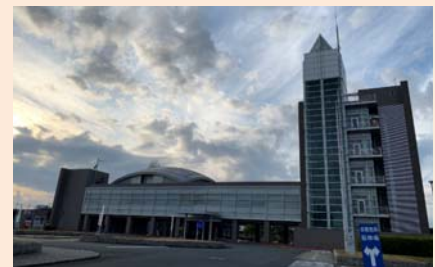


31

茨城県東海村

◇村長

正しく恐れる = イタズラに恐れない
→原子力との共存で大切



◇住民

我が家は放射能から一生逃げ逃れることなく共存する

↓
過去に戻ることを考えていない

↓
強い覚悟



32

原子力施設との共存の在り方とは

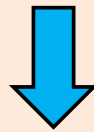
原発立地地域における住民の“想い”

→ 薄い関心／諦念／葛藤／覚悟



地域ごとに異なる

(地域の歴史／習慣／生業／事故の経験／福島経験)



“共存”ということを踏まえると・・・

◎覚悟

→なぜそう思えるのか(着想に至る要件)

→他地域のモデルになるか(波及の可能性)